

2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 6章 13～21 節

説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

2017年11月26日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 12章 1～17 節

説教：私を救い出す主

はじめに

主イエスが墓の穴からよみがえられ、天に上げられてから一週間経った時、天から聖霊がくだり、エルサレムに最初のキリストの教会が建てられました。多くの人々が主に立ち返り、教会には大ぜいの人々が集まります。しかしその後の歩みは決して順調であったわけではありません。内側と外側と二つの問題に直面しました。内側の問題。ユダヤ人は伝統的に異邦人とはつきあってはならないと教えられてきていました。異邦人といっしょに礼拝することなど考えられない。これが大きな問題になった。結局、主はユダヤ人も異邦人も差別することなく救ってくださることがわかり、ユダヤ人と異邦人はいっしょに礼拝できるようになった。そのあたりの事情が11章に書かれていました。

教会が直面した二つ目の問題は外側から来ました。ユダヤ教を信じていた人たちが次々に改宗してキリスト教会に行き始めました。これを見て苦々しく思ったのは、ユダヤ教の指導者たちです。なんとかつぶそうと考える。あるとき、ステパノを捕まえ、一方的な裁判にかけて、石打ちの刑で殺してしまう。そのことをきっかけにして教会への迫害が激しくなり、とうとうあるクリスチャンたちはエルサレムから逃れて難民にならな

ければならなかった。そのような苦しみを通っていきます。

その苦しみは今日の箇所でも続いております。そこで何が起きたのか。そして神はどのように関わってくださったのか。ともに考えて参ります。

1 ヤコブの殉教

1) 使徒の一人

1、2節を読みます。「そのころ、ヘロデ王は、教会の中にある人々を苦しめようとして、その手を伸ばし、ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺した。」

ヨハネの兄弟ヤコブとはだれか。イエスが宣教活動を始められた時のことです。湖で漁をしていたシモン（ペテロ）とその兄弟であるアンデレは、イエスから、「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」と言われ、すぐに網を捨てて従います。その次にイエスが声をかけたのが、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネでした。このヤコブがヘロデに殺されました。イエスの宣教活動の初めから十字架の死、よみがえり、天に上げられるまで、すべてを目撃してきた十二人の使徒の一人です。エルサレムに教会が建てられてからは、ペテロたちとともに中心的な活動をしてきました。それが殺されたのですから、教会にとって大きなショックだったはずで

2) ヘロデ王のたくらみ

なぜヘロデはこんなことをしたのか。1節のところに米印があり、「ヘロデ・アグリッパ一世」と説明があります。イエスが産まれた時に王であったヘロデ大王の孫にあたります。この人は若い頃ローマに住んでいて、そこでさんざんの放蕩生活をし、借金まみれになったこともあるそうです。そんな人でしたがなぜかローマ皇帝の信頼を得て、やがてイスラエルに戻り王の座に就く。けれども若い時からの性格は変わっていないので、国民からの評判が良いわけがない。日本でもテレビや新聞社による世論調査があって、内閣支持率が発表になります。総理大臣はその数字をかなり意識するそうです。低い数字が出ると、支持率回復のために策を練らなければなりません。

ヘロデ王も同じです。選挙で選ばれて王になったわけではありませんが、一定の支持率がなければ政治がうまく回らない。なんとかユダヤ人が喜ぶことをしなければと考えた。そこでユダヤ人がいまもっとも困っていることに目をつける。ユダヤ教を捨ててキリスト教に改宗する人たちのことで困っているらしい。自分が手伝ってやるなら、彼らはしっぽを振ってくれるだろう。そこで、教会をつぶす最も有効な手段を考える。教会の指導者であるペテロを倒すのが一番効果的です。ところが、なぜかそれはできなかつたようです。そこでヤコブを殺すことにした。やってみたらこれが思った以上にユダヤ人の評判になる。ならば次は本命のペテロを狙うことにする。それでペテロ逮捕し、牢につないでしまうわけです。

2 ペテロと教会

1) 逮捕と投獄

ところがすぐには殺さなかつた。3節には「種なしパンの祝いの時期」、4節には「過越の祭り」であったからと書いています。この二つの祭りのいわれは、モーセの時代にまでさかのぼります。イスラエルがエジプトから救われて荒野に逃げる前の日のことです。神はモーセを通して教えます。「羊をほふって、その血をそれぞれの家のかもいに塗りなさい。そうすればわざわいが戸口を過ぎ越していき、滅ぼされることがない。そしてその夜は、種を入れないパンを食べて脱出の準備をしなさい。」

それ以来、ユダヤ人は種なしパンの祝いと過越の祭りを守ってきた。人々は神殿にお参りをし、特別な時間を過ごすことに集中しますので、あまり変なことはできない。それでヘロデ王はお祭りが終わってからペテロをユダヤ人の前で処刑しようと計画します。

2) 主の御使い

ペテロがつながれた牢獄の様子が詳しく書いてあります。「四人一組の兵士が四組。」「二本の鎖につながれて二人の兵士の間で寝ており、戸口には番兵たちが牢を監視していた。」「第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると。」かなり嚴重です。この監獄から脱獄出来る者はひとりもいないでしょう。

ところが、ペテロが処刑されるという前の夜、御使いが現れ、不思議な出来事が起きてペテロは解放されていく。ペテロも最初いったい何が起きているのか、分からなくて、これはてっきり夢でも見ているのだろうと思った。でも我に返った時、気がついた。11節。「今、確かにわかった。主は御使いを遣わして、ヘロデの手から、また、ユダヤ人た

ちが待ち構えていたすべての災いから、私を救い出してくださったのだ。」

3) 再会

すぐにマリヤと呼ばれる姉妹の家に向かって玄関の戸をたたく。そこでは、ペテロが解放されるようにと徹夜で祈りが開かれていたのですが、応対に出た女中がどんなに言い張っても、だれもペテロが戻って来たことを信じない。やがて女中の話が本当だと分かると人々は大喜びしてペテロと再会を果たすことになります。

おもしろいですね。困った時は真剣に祈る。それでいざ祈り聞かれて目の前に見えていのに、「まさか、そんなことありえない」と言って信じない。案外そんなものなのかもしれません。

4) なぜ？

ここを読むといろいろな疑問が湧きます。どうしてヤコブは殺されなければならなかったのか。ペテロを救い出すことのできる神であるなら、ヤコブも救うべきではないのか。神はなにか区別というか差別するのか。救い出す方法も不思議です。御使いが現れて鎖をはずし、番兵の目をくらまして外に出る。門が自動ドアのように開く。手が込んでいます。ペテロだって明日自分は処刑されると思えば、相当のストレスを感じたに違いない。そんな目に遭わせないで、最初から逮捕投獄されないように守ってくれればよいのに。いったい御使いとは何者なのか。質問されても私もよく説明できない。ただ言えることは、神の御旨であれば、神はこのようなことも簡単にできる。言えるのはそこまでです。

ひとつ付け加えるならば、神はヤコブとペ

テロと差別をしているわけでもありません。ペテロには地上の働きがまだ残されていたので、ここで救い出され、奉仕を全うするためにほかの所へ出かけます。そうやって、ペテロも最期は殉教の死を遂げていきます。

3 イエス・キリストと教会

1) 教会は迫害に遭う

そもそもどうして教会はこのような迫害を受けなければならないのか。幸いにして、今私たちはこれほどの迫害を経験することはありません。しかし、世界を見渡せば、教会が焼き討ちにあう、クリスチャンということで殺される、そんなことがどこかで常に起きています。日本も、過去においては韓国の教会を迫害し、信徒達を集めて火をつけ、建物から逃げようとした人たちを中で全員打ち殺すというひどいことをしました。そのことを忘れてはならない。

黙示録を見ると、新しい天と地がやって来る前に教会が激しい迫害に遭い、多くの信者達が殺されていくことが書かれています。黙示録6章9節にこうあります。「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。」イエス・キリストこそ私の主ですと告白し、証したために殺される人たちが出る。聖書はこのように記しています。

2) イエス・キリストが受けられた苦しみ

ここだけ聞いたら怖い、恐ろしい、信じるのをやめようかと戸惑うかも知れません。二つのことを申し上げます。一つ目。私達を罪から救うために、イエス・キリストは何をしてくださったのですか。十字架の上で苦し

んでくださった。死ぬ必要のない方がいのちを捨ててくださった。それがあつたので私たちは今、罪から救われていのちの約束をいただいています。主がまつきに迫害に遭われ、殺されました。私たちもやがて主と同じところをたどっていく。これは覚悟するしかない。

3) イエス・キリストが流された血によってこれだけではあんまりですから、二つ目に安心できることを語ります。先ほどの黙示録のみことばになんて書いてあるか。「神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。」

そしてこうも書かれている。神の前でひれ伏して神を礼拝していた人々が白い衣を着ているのを見たヨハネは、長老がこう説明するのを聞きます「彼らは、大きな患難から抜け出てきた者たちで、その衣は小羊の血で洗って、白くしたので。」(黙示録7章14節)。殺された人たちのたましいはどこにいるか。祭壇の下にいる。神のすぐそばにいる。血だらけの衣は、小羊の血によって洗って白くされている。

自分の体から血が流れる。愛するものから血が流れ、死んでいく。考えただけでも恐ろしいことです。しかし、小羊の血が私たちの血を白く洗い流してくれる。そんなことがありうるのか。主が流された血は私たちとは比べものにならないほどに赤い血であった。私たちの血を洗いよめることができるほどの赤い血であった。そういうことになる。

ひとときは悲しみを通るかもしれません。しかし主は私たちの涙をすっかりとぬぐい去り、輝くばかりの白い衣を着せてくださる。その日を待ち望んでいきます。そのとき、主

は私を救い出してくださつたと、はっきりと分かります。

ある方から尋ねられたことがあります。「先生はこの教会をどのように導こうとお考えですか。」こう答えることにしています。「教会はかならず迫害に遭っていきます。その迫害の苦しみにも耐え抜くことができるような信仰を持つことができるように。そのように導きたい。」

もしかして、そんな偉そうなことを言っている牧師が、迫害が怖くなって逃げ出すかも知れません。そのときはあざけってください。躊躇することなく私を追い出し、もつとしっかりとした新しい牧師を迎えてください。